
東方真偽観 ―パチュリーに嘘をつけ！―

穴殿 美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方真偽観 ―パチュリーに嘘をつけ！―

【Nコード】

N8125R

【作者名】

穴殿 美里

【あらすじ】

「私につける嘘は無い」

ある本を読んだ事がきっかけで、嘘を見抜ける「読顔力」の能力を手に入れたパチュリー・ノーレッジ。

様々な研究や実験、何でもないほのぼのとした事件の解決を繰り返していくパチュリーだが、やがて大事に隠された嘘に立ち向かうことになる。

人気海外ドラマ、「ライ・トゥ・ミー」にはまった作者が送る、

完全オリジナルの表情分析ミステリー！

物は嘘をつかない・序章（前書き）

《結合・改訂しました》

皆さん、こんにちは。ミステリー大好き穴殿美里です。
いっぺん東方でミステリーをやってみたかったです。
表情分析なんて結構ためになると思います。

感想を心からお待ちしております。

物は嘘をつかない・序章

零

——この作戦は……、まだ誰にも破られたことはない。

もはや完璧。と言っているくらい、全てがうまくいっている。

長い間策を練って、もう何年も同じ方法で繰り返しているが、これまでこの作戦は決して破られたことはない。

パターンは同じ、そしてもしものときの保険も……バツチリ存在している。

この策の準備は長く時間を要するが、もちろん見返りに見破られる危険性は零にも等しくなる。

確信は十二分にある。

——さあ、次の獲物への準備に入ろう。

壱

「……うわっ！」

——バサッバサッ！

紅魔館の図書館。

常に静かで、日明も活気もないこの錆びたこの書庫に珍しく騒音が響いた。

音を出した張本人、紅魔館の主の友人でまるでここに住んでいるかのように図書館にいるパチュリー・ノーレッジは、本棚に手を伸ばそうとしたのか、衝撃が災いして埃の衣を纏った古書の雪崩に巻き込まれてしまった。

沸き上がったのは、静寂をきる本の雪崩だけではない。湯気のようになぜか粉埃まで天井に昇っていた。

「いたた……」

本の山から這い出したパチュリーは、特に表情を出すこと無くぶつけたところを撫でた。

くそつたれ。ただディクスン・カーの「夜歩く」を元の棚に戻そうとしたのになんて、ドジな展開になったんだろう。

「こぶになってなきやいいけど……」

脳天に墜落したのはとある一冊。しかも文庫や新書ならともかくハードカバーの一撃は、どの本も勝っていた。

「くそつたれ……」

起きた偶然にボヤクパチュリー。

だが、本来なら八つ当たりはその本を叩きつけるはずが、不意に投げる手を止めた。

「……………」

投げようとする一歩手前で、目に入った本の題名がパチュリーの気を引いたのだ。

「――『表情分析入門』？」

色あせた黄色いカバーに二つの異なる表情。そして作者は心理学で有名なポール・エクマンの名前が。そして題名のサブには、「表情に隠された意味をさぐる」と文句が書かれていた。

それはパチュリーにとって非常に興味深い本だった。

かつて『読顔力』という能力を聞いたことがある。

幻想郷の民が携える異端魔術的能力とは異なった、誰にでもできる「目利き」型の常識能力で、なんでもわずかな表情と仕草だけで生き物の心が読めるとか。

「……おもしろそうね」

本への怒りの感情は彼方へと消え去った。

はまり始めた知識欲旺盛なパチュリーはその場に座り込み、本を開いては読み始めた。

（表情は万国及び、人外問わず共通性がある。浮かぶ表情はごまかすことはできない……）

パラパラとページがめくられてゆく。幾多の本を読み続けた速読が活かされているのか、この本の情報がパチュリーの脳に蓄積されてゆく。

その表情は、真か偽か。日頃見てきた人の浮かべる表情に隠された特徴はいかなるものか。

魔術とは違う新たな術にパチュリーはどっぷりと浸かっていた。

しばらくパチュリーが本を眺めていると、図書館の扉が開かれた。入って来たのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。普段は常に主のお世話に没頭しているが、今は珍しく盆を携えて図書館にやってきていた。

「どうも、パチュリーさん」

「どうも、咲夜……」

愛想良く振る舞う咲夜に、集中真っ盛りのパチュリーは軽率に返した。

咲夜の手の盆には、見るからに美味しそうなショートケーキと金縁カップに入れられた紅茶が、湯気を上げていた。

「どうぞ。今日は『ダンザ』の高級セブンベリーショートケーキとアールグレイですよ」

「『ダンザ』のセブンベリー？　咲夜それって……」

踏み入れた咲夜に、パチュリーは頭だけ振り返った。

「あのしけた甘味屋にあるちょっと普通のケーキより高いあれ？」

「そうですけど」

「なんでわざわざ高級とつけた？」

「雰囲気、あそこは紅魔館だから……」

「だから？」

「見栄を張った」

納得。細かに相打ちを打ったパチュリーは、再び本に顔を戻した。咲夜は図書館の先を進み、本が平に積み重なるデスクにケーキを

乗せた盆を置いた。

「何を読まれてるんですか？」

「『表情分析入門』。表情に隠された意味をさぐるの」

「……また、晦渋な本ですね。まったく知識に貪欲な人は次元が違いますね」

呆れ果てた咲夜は、肩をすくめるように所感を述べた。

「……………」

パチュリーは、咲夜を眺めながら読書を中断した。

今読み終えたのは、『怒り』と『幸福』の項目。この二つの特徴は、すでにパチュリーの頭に入っていた。

ここで思いついたのは、咲夜は究極のメイドであること。メイドとは時折、主人や客人をもてなすために例え不快があろうとも、無表情もしくは愛想の良い表情にしなければならない。

もちろん、パチュリーも主の友人だから、ニコニコは絶やさないはずだ。

早速、このメイド長で浮かべる微表情を分析してみることにしよう。

表情を変えるのは、まず話題だ。

「——ねえ、咲夜」

「何でしょう？」

やはりニコニコしている咲夜。

「さつき窓から見えたんだけど、お宅のお庭番が堂々と昼寝してるわよ」

「……………そうですか」（ピクン）

これがギャグなら、咲夜は血相を変えて出て行くが、今の咲夜は規律正しくニコニコと返事だけを返した。

しかし、今の咲夜の表情は僅かに怒りを剥き出していた。

パチュリーは早速咲夜で分析を始めた。

（一瞬、眉間に縦のしわが寄った。そして、目もやや大きく開いた。さらに唇も一文字に結んでいる。『怒り』は眉と目と唇がそろって

成立する。

一目瞭然、咲夜は『怒り』を笑顔で押しつぶしている……)

パチュリーの多分嘘だと思う告げ口は、咲夜の踵を返しさせた。

「ちよつと急用を思い出しました。優雅なティーブレイクを、失礼しまーす」

分析は成功、咲夜はお庭番の制裁に足を運んだ。今パチュリーにできることは、汚名を着せられたお庭番が本当に寝ていることと、制裁に耐えきっていることを願うだけだが、そんなことはとるに足らない事だった。

実験は成功だ、ヤツリイ！

パチュリーは面には表さないものの、密かにガッツポーズをとった。

(これは、熟読すればもっと強くなるかもしれない。そう、人の嘘が暴けるくらい！)

けど、訓練を積みたんだけど、どうしようかな……)

パチュリーが悩みながら当たりを見回すと、そこにはデスクに乗ったセブンベリーショートケーキがあった。

「いいこと思いついた」

＊

『表情分析入門』を読み終えたその後、パチュリーは一寸だけ図書館を出て行き、すぐに戻ってきた。

入館と同時に、コツコツと乾いた靴音が響いている。もしかなくとも、誰かがパチュリーのいぬまに図書館に入ってきたようだ。

「誰かいるの？」

「パチェ！ やつと見つけた！」

発したの声に導かれて、パチュリーの前にあどけない娘がやってきた。

彼女の名前は、フランドール・スカーレット。紅魔館の主の実妹で、見た目に比例して幼い吸血鬼である。って知っているか。

「珍しいわね、フランが図書館に来るなんて」

「この本が私の部屋にあったの。だから返しにきたんだよ」

そう言うフランドールの手には、分厚いハードカバーの本が握られていた。題名はミルトンの「失樂園」。内容は古典を読んでいるようなほどぶっ飛んだ文章構成で、普通に小説を呼んでいる愛読者にも苦渋を強いられる歴史ある本であった。

「おおかたレミイが置き忘れたのね。わざわざ届けてくれてありがとう。」

そういえば、わかりやすく面白い本を見つけたんだけど、読んでみる？」

「うん！」

フランドールから本を受け取り、口だけで愛想笑いをしながらパチュリーは愛読書の積もった自分のデスクに向かった。

その時、パチュリーはあることに気がついた。なんと、咲夜が持ってきた皿からセブンベリーケーキが無くなっていたのだ。

「あれ？ 私のケーキが……、無くなってる？」

そう一言呟くとパチュリーは不意に後ろを向き、フランドールを見ようとした。だが、フランドールは目を合わせるどころか故意に顔をそらしていた。

「……………」

「……………」

当時者から目を離すのは、そいつが犯人である心理的証拠。別にこれは、分析しなくてもありがちな結末である。

（このわざと食わずに見える位置に置いたケーキは、たぶんフランが食べた。予感的中、やっぱりまだまだ子供。

それと同時に、いい練習相手！ ごめんね、フラン。そしてありがとう、分析の機会を与えてくれて！）

練習にはまず些細かつ簡単な事柄から。フランドールは幼い分、自己防衛の意識は備わっているはず。食ったか食わなかったかは、ありがちでつきやすい嘘だ。

犯人はもう目に見えているが、パチュリーは早速フランドールの表情分析に入った。

その生き物から嘘をつかせるには、聞きたい奴を疑う事から始まる。

「フラン、ここに置いてあった私のケーキ食べた？」

「うんう、食べてないよ」

もちろんフランドールは否認する。そうこなくっちゃ。

「本当に食べてない？」

「食べてないってば」

「本当に食べてないの？」

「食べてないってば」

「嘘ついてない？」

「食べてないってば！」

三度目のフランドールの返答は、荒々しく返ってきた。しつこさが効いたのか、フランドールの表情には『嫌悪』が表されていた。だが、今フランドールが浮かべる『嫌悪』には自然とは異なっているようにパチュリーには感じた。

（この『嫌悪』、どこかおかしい……！）

パチュリーはここで、あることを感じた。もしも疑われたなら、誰だって不愉快に、つまり『嫌悪』を感じるはずなのだ。だが、今のフランドールは単純過ぎても顔に浮かぶのは不自然な『嫌悪』であった。

（さっそく、ほころびを見つけた！）

「あえて聞くわ。フラン、私はフランを疑っているけど不愉快に感じてるの？」

「ふゆ、かい？」

「自分にとっていい気持ちがないこと。私がこうしてしつこく聞いているなら、フランは嫌な気分のはずよね？」

「そうだよ……」

当たり前の事を尋ねるパチュリーに、フランドールは表情を省い

て頷いた。

その時、パチュリーの口元がニヤリと笑った。

「――フラン、悪いけどその台詞は嘘よ」

「ど、どうして!？」

「誰かを疑ったとき、その人が無実なら必ず不愉快に思うはず。つまり『嫌悪』。

でも、さっきのフランにはそれがなかった」

「な、なんでそんなことがわかるの!？」

「何でだと思う?」

パチュリーの鋭い指摘は、フランドールを焦らせた。たぶん、凶星なんだろう。

（『嫌悪』は『怒り』に近いけど、微妙に違う。フランはしつこさに微弱の嫌気がさしたけど、肝心の疑ったことには嫌気がない。

フランに『嫌悪』がない根拠は、鼻にシワがよっていないこと!

この表情は誤魔化しているにしか過ぎない）

『嫌悪』を取り繕ったと知らされたフランドールは押し黙り、パチュリーはその沈黙を期にさらにフランドールに近寄った。今度は、少しシリラスになって問いただした。

「もう一度聞いわ。フラン、あのデスクにあったセブンベリーを食べたの?」

普段はこんなことでは怒るわけがないパチュリーだが、実験のためにフランにわざと圧力をかける。詰め寄られたフランドールは一寸『恐怖』を浮かべたが、すぐに反撃に口を開いた。

「だから! わたしは食べてないってば! わたしがやったという『しょーこ』はあるの!？」

「証拠?」

おいしい。普通の推理小説ならこの台詞が出たら犯人はお終いなのに、表情分析のために証拠は用意していない。

フランドールのある意味決死の反論は、パチュリーを納得させた。

「確かに、証拠が無かったら犯人とは確定できないわよね……。わかったわ、フランを疑うのはもう止める。ごめんなさいね」

少しだけ落胆したようにため息をついたパチュリーは、フランドールから離れた。

「……………」

「……………」

お互いが黙り始める。今のフランドールには、何の表情もないように思われた。

だが、パチュリーが諦めを宣言した僅かな一瞬、パチュリーはフランドールが微かに浮かべた表情を見逃さなかった。

語るのはフランドールの顔の筋肉ではなく、その瑞々しく潤った唇だ。

「――フラン、今私が諦めたとき安堵しなかった？」

「え！？　してないよ！　そんなの……」

「でも詰め寄ったときと普通の時と比べて、今は口が緩んでいたんだもん。私が引いて、安心したでしょ」

「だからって、わたしがやったという『しょーこ』にはならない……」

内面を少しずつえぐりつつあるが、フランドールは論を埋め直す。論より証拠とはよく言ったものだ。

だったら、証拠をぶつけてみるのかなさそうだ。

「あれ何かしら？」

パチュリーは急に話をそらし出すと、フランドールを差し置いてデスクに向かって行った。

手にとったのは、先程フランドールが持ってきた『失樂園』の本であった。パチュリーは改めて本を手にとって気がついた。問題は、そのハードカバーに付いているの付着物だ。

「フラン、この本に付いたシミはなーんだ？」

パチュリーが掲げて見せた本には、茜色のハードカバーと合って

いるようなシミが付いていた。パチュリーはまた不敵に笑って見せた。

「このデスクの上で、美味しくいただいたのね」

「――あうっ！」

ついにフランドールは凶星をつかれ、根をあげてしまった。

「これで満足？」

「う、うう……」

「もう反論はできないわよ。いい加減に認めたら？」

「う、うう、うわーん！」

パチュリーの表情分析の推理は完璧に当たり、フランドールはついに泣き出してしまった。

「――Jackpot！（大当たり）」

「ご、ごめんにゃひゃーい！！！」

泣きながら謝るフランドール。だがパチュリーは、それを勝利に満ちたような微笑みで、泣きじゃくるフランドールを見続けた。もちろん、これ以上の責め立てもなく。

「ぐずっ、……あれ？」

フランドールは涙を拭いながら、そのパチュリーのご機嫌な表情について疑問を浮かべた。

「お、怒らないの？」

「フラン、この私がお菓子を他人に横取りされたからって激怒すると思ってる？」

「え？　だってだって……」

性格を一転させ、パチュリーはフランドールをうろたえさせた。グズグズとまだ涙がこぼれている、かわいい奴め。

「実はね、フラン。あんたは最初っから私の練習相手になったのよ。表情分析のね」

「ひ、ひょうじょうぶんせき？」

「そう、人の顔を見て嘘かどうかを見抜く研究のこと。私は今、読顔を極めようとしているの」

「じゃ、じゃあ、あのケーキは最初っから……」

「フランドールが誤魔化すだろう、その状況を作るため。私は最初っからフランにケーキ食べさせる気で、後から白々しく疑っていたの」

「……………」

「まあ、そんなわけだからいい練習になったわ。ありがとうフラン」
「……………」

涙がすっかり渴き、やるせない顔で睨みつけるフランドール。そんな事に構いもせず、パチュリーはすっかり冷めた紅茶を啜った。

＊

その日の夜。蠟燭の小さい灯だけが明るく照らす図書館で、パチュリーはデスクに向かって、さらなる表情分析の研究に励んでいた。途中、図書館の扉が二度ノックされる。そしてパチュリーの許可がでる前に扉から誰かが入館してきた。

「パチェ、入るぞ」

入ってきたのは、レミリア・スカーレット。紅魔館の主である吸血鬼で、パチュリーとは無二の親友であった。

「パチェ、さっきから何をやってるんだ？」

「顔を見るだけで人が見抜ける読顔力の研究。そっちこそ何かよう？」

レミリアが背後にいるのに、全く振り返ろうとしないパチュリー。没頭してても話は聞いているようなので、レミリアはそのまま話を続けた。

「昼間っから、フランが自室から出てこないんだ。部屋でむせび泣いている」

「それは可哀想」

「部屋に入る前、図書館から『ちくしょー！！』と叫びながら屋敷を走り抜けるフランの姿を目撃したと咲夜達から証言もでているのだが、何か知らないか？」

「あー、こころあたりがある」

そう言うなり、パチュリーは椅子をレミリアの方に向き変えた。さらに片手に表情分析の本も携えて。

「それが表情分析の教本か。だがそれがフランの発狂と何の関わりが？」

「実は、表情分析をフランで実践してみたの。あの子単純だから、すぐに顔にでちゃうから実験体に相応しいかと」

「フランドールが図書館でパチェの手伝い？　ぶっちゃけ有り得ない話だな」

「簡単なことよ。人のケーキを食ったか食わないかの嘘発見。もちろんフランはなにも知らない」

「でも、どうしてフランが図書館でケーキを？　あの子はそう簡単に図書館には入らないぞ」

首を傾げる姉のレミリアに、パチュリーはもう一つの本をレミリアに見せた。それは茜色のハードカバー、ミルトンの『失樂園』の本だった。

「ミルトンの『失樂園』？　それが？」

「フランをどうにかして図書館に来させたのか、その方法。それは、このお子様には適さない難解な本をフランの部屋に置くだけではないの。」

自分にはわからない本は持っても仕方がないから、わざわざ返しにこの図書館に足を運んできたの」

「なら咲夜に任せればいいではないか？　せっかくの使用人なのに」

「咲夜はあの時、ちょうどお庭番の制裁に向かっていたわ。もちろん、サボってたかは不明だけど制裁に向かっていたのは確かよ」

「だからか。わたしが昼寝をしているとき美鈴の葬式の夢を見たのは」

思い返せば、昼寝中のレミリアには確かに断末魔の悲鳴が耳朶に響いていた。なるほど、これでは咲夜も動けないわけだ。

パチュリーの解説は続く。

「目標の部屋にこっそり本を置いて、自分はしばらく図書館を留守にする。もちろん、見えやすい位置にケーキを置く。配置は咲夜に任せた。彼女は究極のメイドだからね」

「なんの関係が？」

「給仕をするメイドは、人に食べてもらうためには、もっとわかりやすい位置に置くはずよ。咲夜は究極だから、邪魔にならずかつすぐ目に付くような場所を選びとって、ケーキを置いた。」

もともとは私に用意されたケーキだから、取り込み中の私を気づかって目立つ位置に置いた」

「だからケーキはフランに見つかり、迷わず口に入れた。で、当のフランの表情分析はうまく言ったのか？ あの子は単純だが、バカでは無いはずだ」

「もちろん、手強かったけど読み取れたわ。極めつけは、証拠品として上げたこの本よ」

さらにパチュリーは手にした本の、ある位置を指でさして見せた。そこには、本と同じ色のシミが付いていた。

「——ってコレは古い本にありがちな、ただのシミじゃないか。食べ物によるものではないぞ」

「知ってる。でも、コレを見せただけでフランはあっさり認めちゃった。おおかた、自分がつけたベリーソースだと勘違いしたやつたんでしょうね」

「ひっかけたのか。フランをすべて語るに落とさせるために……」

すべては、一から仕組まれたパチュリーの罠であった。レミリアは呆氣にとられ、苦笑いを混せてパチュリーを見つめた。相変わらず面の皮が厚いパチュリーだが、能弁に語っている今のパチュリーには、どこか悦楽に微笑んでいるようにレミリアには見えた。

……すると、

——ガシャン！

「フランお嬢様！　どうかお静まりを！」

「うるさい！　ちくしょー！」

咲夜の懇願も虚しく、静寂な夜の紅魔館にフランドールによる破壊音がけたたましく響いた。

どうやらフランドールは部屋からようやく出たと思えば、片っ端から八つ当たりにも暴れまわっているらしい。

「全部思い通りだったなんて、パチュリーなんか大嫌い！！」

――ガッシャァン！！

「お嬢様、それはいけません！　それはレミリアお嬢様の作りかけのガンブラで……」

「うるさい！　お姉ちゃんのサイサリス共々粉々にしてくれる！」

――ベキベキ！

たった一つの実験が災いを招き、被害はレミリアの努力の結晶にまで及んだ。

もう二度と元に戻らないほど粉々に……。

「ソロモンの悪夢が散ったわね……」

「ち、ちくしょー！！」

人事のように無関心に言うパチュリーに、被害を被ったレミリアはただ叫ぶだけであった。

物は嘘をつかない その壺（前書き）

すみません、結合しました。

物は嘘をつかない その壱

弐

あれから何も疑うものはなく、紅魔館に緩やかな時が流れていた。気候適温春爛漫、その心地よさは紅魔館の専属門番が芝生の上で堂々と昼寝をしているぐらいだった。

この日、パチュリーは珍しく外出を試みていた。もともとパチュリーは病弱なあまり、そんなに外に出て行く体力があまりない。

誰かに言わせれば貧弱貧弱ウ。

だが何かの気晴らしに必要な資料を得たい時には、なるべく疲れない程度に外出をする。

今日は特に、パチュリーは本を欲しがった。更なる表情分析の教本だ。

「パチェ、外出するのか？」

パチュリーがエントランスの扉に差し掛かる所で、レミリアが話しかけてきた。

「うん、本屋に行ってくる。一緒に行く？」

「いや今日はやめておく。UVブロッククリームが切れてるんだ。行くなら今月の『hobby Japan』買ってきてくれ」

「お金は？」

「立て替えてくれ。帰って来たら払うから」

「アイアイサー、行ってきまーす」

そう答え、パチュリーはだだっ広い紅魔館の扉を開いた。

これが紅魔館の住人達による外出時の会話。どこにでもあるような、家族同士のような会話であった。

休日問わず、幻想郷の繁華街は相変わらず人通りが豊かである。

この繁華街には何でもある。

八百屋のような食料店はもちろん、服屋や宝石店、それにゲーム店、中古符車屋。当然、パチュリー御用達の書店や古本屋まで揃っている。

もちろん顔見知りも集っている。書店による途中で、パチュリーは知り合いに出くわした。

「あり？ パチュリーか？」

「……魔理沙」

ばったり道に出会ったのは、魔法使いの霧雨魔理沙。紅魔館に初めてやってパチュリーと戦ったと以来、堂々と出入りするようになり、図書館からさっくりと本を借り（パク）にくる厚かましいがその淡白な様にどこか憎めない奴だった。

「お前が外出なんて珍しいな。気晴らしか？」

「今日は本を買いにきただけ。それ以上とそれ以下の理由は無いの」
愛想良く世間話を持ち出す魔理沙だが、パチュリーは端的にそれを打ち返した。別に魔理沙は嫌いではないのだが、根に持つ要素はあった。

「相変わらず冷めてるなあ、今不機嫌か？」

「本棚に出来た隙間が永久に埋まらなかったら、不機嫌にもなるわよ。くそつたれ」

「その『くそつたれ』って台詞、なんかパチュリーの口癖になってないか？」

「そんなわけない、……でしょ？」

かく言う本人にも、自覚は曖昧にあった。思い当たる節は、魔理沙が紅魔館に来るようになってからだ。

○

魔理沙、来日十三日目。拝借書数、二二冊目。

「パチュリー、今度はこの『ジョーカー』借りて帰るぜ。バイビー

！」

「待って、それまだ読み途中なのに！　もう！　——くそったれ！」

魔理沙、来日一〇四日目。拝借書数、二五八冊目。

「また読みたいと思った本が無くなってる！　いつの間に、魔理沙ったらもう！　——くそったれ！」

魔理沙、来日五三七日目。拝借書数、八七四冊目。（うち強制返却数、五四八冊）

「魔理沙ったらもう！　また人の許しを得ずに、無断で本を持って行っちゃってえ！　——くそったれ！」

ひとり本棚に向かって毒づくパチュリー。だが、その背後からレミリアが割り込んできた。

「ああ。その本なら、さつきフランと美鈴が焚き火の素にするからって勝手に持っていったぞ」

「——くそったれえ！」

○

思い返せば、全ては魔理沙のせいであつた。だが、原因を作った本人はケロンとしていた。こんな魔理沙だから怒れない。パチュリーは蘇った記憶を胸にしまった。

「おや？　パチュリーさん、珍しく外出ですか？」

魔理沙に続いて、今度は上空からパチュリーに声がかかった。

上空から……。パチュリーが空を仰ぎ見ると、今度は空を飛ぶ知り合いに出会った。

「おいーす、射命丸。相変わらずパラっているのか？」

「そんな言い方しなくてもいいじゃないですか魔理沙さん。わたしはこれでも幻想郷で唯一の『ますめでいあ』なんですよ」

天狗独特の黒い翼をはためかせてホバリングし、射命丸文は改め

てパチュリー達と同じ高さになった。首には自前のカメラだけではなく、新聞紙を乗せた袋までぶら下がっている。本人曰わくのマスメディアは、伊達では無いらしい。

「そう言えば、ご存知ですか？　ここ半年間でこの繁華街で頻繁に起こる万引きの話」

さすがにジャーナリストになると、話題の持ちきりが上手い。やってきて早々の射命丸の話はこの話題であった。

「万引き？」

一言だけオウム返しに言ったパチュリーは、自然に視線が魔理沙の方に向けた。

「わっ私じゃねえぞ！」

「……ふーん」

「本当だぜ！」

疑われて反論する魔理沙。もちろん無実なのは知っている。今の魔理沙は嘘を言っている表情ではないからだ。もちろん、あえては言わないが。

「心配しなくても、犯人は既にみんな捕まってますよ。ただ、万引きの被害店の数が異様に多いだけなんですよ」

「でも、ここは幻想郷だぜ？　貧富の差もあればスラムみたいな面だっただろう？」

魔理沙が言った。

「仮にそうだとしても、普通なら食べ物を必死で盗むはずですよ。でも、ここ最近のはみんな洋服や宝石のような高価な娯楽品ばかりだし、捕まった犯人達には家も家庭もあつたんですよ」

「まあ、確かにスラムは、手を出さない代物だよな……」

魔理沙は頷いて、射命丸はさらに話を続けた。

「例えば、その高級服店で流行りものの服を盗んで捕まった女の子が、隣の奇石店には赤石の首飾りを盗んだ主婦、向かいの新品ゲーム店もソフトを盗んだ青年が。その甘味所ではオッサンが」

「オッサンが甘味所で何を万引くんだ？」

「女の子を盗んで行きました」

唐突に出た射命丸の台詞に、パチュリー達は口をへの字にしてドン引きした。

「わかりますでしょ？ どの店も必ず一件は被害にあってるんですよ」

「確かにこの数は異常ね……」

「もっと情報が欲しかったら、新聞見ます？ 小さな記事ですが書いてありますよ。一つ一五〇円ですがどうです？」

「買うわ。ちょっと待って、小銭がポケットに……」

そう言って、パチュリーはジャラジャラと鳴りだしたポケットの中を弄りだした。

「お前は中年のサラリーマンか？」

「細かい事言わないでよ、財布に入れるのがかったるときだってあるんだから。」

あー、くそつたれ。十円が足りない。二〇〇円で、釣り銭はチツプ代わりに」

「毎度あり！」

料金と新聞紙を交換し、パチュリーは早速その場で新聞を開いて見た。魔理沙も頬が当たるくらい近くで割り込み見ている。

「繁華街でまたもや万引き犯捕まる。ここ半年で十数軒目、容疑者一向に全面否定……」

「なんだ？ 捕まったのに往生際が悪いなあ……」

二人は並んで三面記事の隅にかかれた狭く細い記事に目を通した。

「犯人がそう言うのはお決まりのパターンですよ。みんな言ってます。物的な証拠もあがってるのに」

やれやれだぜ、と言わんばかりに、射命丸は呆れ果てて肩をすくめた。

「一つ聞いていい？ 射命丸、容疑者達が盗んだ動機はどうだったの？」

「動機、ですか？」

「誰かが何かをするには、理由があるでしょ？　結局、動機は何だったの？　出来心？　ゲーム感覚？」

「それは……」

パチュリーが指摘した途端、射命丸は言葉を詰まらせた。そして、
「まあ、そうなんじゃないですかね……」

と、首筋をさすりながら曖昧に答えた。

「……………」

「でも別にいいでしょ。ある意味連続でも、犯人はみんな捕まってるんだし！」

「確かにね……」

「でしょう！　というわけで長居しましたが、お二方も、捕まってわたしに名前と記事を書かせないようにお願いしますよ！」

「はいはい」「へいへい」

身を乗り出して釘を刺す射命丸に、パチュリーと魔理沙は軽率に返答した。

「じゃあ、わたしは次なるスクープが待ってそうなのでこれにて失礼しま〜す。――慧音さん！　川に落ちたキャラメルが今年最大の大惨事を招いたって本当ですか！」

そう遠くに叫びつつ、射命丸は再び羽を広げて空に舞い上がった。本当に忙しい奴だった。

「――川に落ちたキャラメルが？」

「へへーん。私が落としたんだ、あのキャラメル。あれは酷かったぜ、森の七坪が朱に染まって……」

「もういい！　聞きたくない。書店にいくよ」

何を語るのか想像もつかないが、パチュリーは残酷な魔理沙の話を強制的に打ち切って、再度書店を目指した。

「待ってくれ、私もいくぜ」

＊

すたすたと書店に先ゆくパチュリーに、魔理沙は後を追うように

着いていった。

魔理沙達が赴いたのは、何処にでもあるような自営の小さな書店『二葉社』。表には銀のマガジンラックが置かれ、最新の雑誌はみんな平に陳列している。今にも、の○太君が立ち読みしてそうなどこにでもある書店であった。

ラックの上には、立ち読みお断りの注意書きまでご丁寧上添えられていた。

若人のつい癖で、魔理沙は並ぶ雑誌のラックに首を伸ばした。

「魔理沙、そのラックには『hobby Japan』は無いわよ」
歩く速度が低速する魔理沙に、パチュリーは先に進みながら言った。

『hobby Japan』？ パチュリーは何の本を買いに来たんだ？ そう疑問を頭に浮かべながら、魔理沙も後に続いて書店に足を踏み入れた。

入店した途端に、魔理沙の目に一番に入ったのは入り口の両端にある背の高い木の枠組みだった。

「いつも店に入って思うんだが、この木の枠組みは何なんだ？」

「それは、昨年から導入された万引き防止のセンサーよ。中にお札が仕組まれて、未会計の商品が素通りすると警鐘がなるの」

「センサー？ そんなもんあっても万引きは減ってないぞ」

「あるからこそ、ここ最近大量に見つかってるんでしょ」

それはごもつともだ。魔理沙に丁寧な解説をしながら、パチュリーは本を探しに店内を巡った。

「んで、コイツはどんな構造になってるんだ？」

「簡単よ。例えばこの漫画の場合、中にお札状の探知符が挟まっている。立ち読み防止も兼ねて開かない上、普通の人には簡単に取り外せない術がかかっているの」

パチュリーが試しに持ち上げたのは、一つの漫画。一見何の包装もされていないが、パチュリーが本を揺らすとバサバサとページが舞うはずが、まるで見えないビニールにくるまれたかのようにピツ

タリと固定していた。まったく、最新の符技術には頭が下がる。

「ところでパチュリーは何の本を探してるんだ？ あれだけ本があるのにまだ読み足りないのか？」

「いいえ、『読顔力』の本を求めに來ただけ。あとレミイが『hobby Japan』を買ってきてって」

「どく、何？」

「『読顔力』。生き物の表情を分析する能力のこと。見極めれば、嘘が見抜ける」

「へえ、嘘が見抜けるなんてそいつはスゴいぜ。パチュリーはそんなことできるのか？」

「まあね。フランに試したら大成功だったし、自信はあるわよ」

「面見ただけで、嘘が見抜けるかあ」

なんか羨ましいなあ。そんな事を思いながら、魔理沙も冷やかすつもりで、のんびりと本棚を眺めていた。

と、突然、店内に警鐘が早く鳴り出した。

——ビビビビビッ！

「なんだ？ 火災ベルか？」

「いいえ違うわ。初めて聞くタイプの鐘の音ね」

いきなり鳴り響く警鐘に、魔理沙とは対照的にパチュリーは平然と落ち着いていた。

「ちよつと君！ そこを動かないで」

店員らしき人物が、入り口付近で誰かを呼び止めた。

魔理沙とパチュリーが本棚の影からこっそりと覗いて見ると、やはり入り口で店員と少年がなにやら揉めていた。

「あ、あの、何か？」

急に起きたことに少年は戸惑いを隠せないでいた。肩にぶら下げた白いトートバッグを店員があさる。

すると、少年のバッグからお札がついたままの漫画本が四冊も見つかった！

「これはなんだ？」

「え？ え！？ し、知らないよ！ こんな、バッグに入れてない！」

店員が手にした漫画本が少年に突きつけられると、少年はさらに戸惑う。

これが今流行りの万引き犯であるなら、魔理沙には白々しくも思えた。思わず、魔理沙は見下すような眼で少年を眺めていた。

「ちょっとコッチで話そうか。来なさい！」

「そんな！ 待って下さい！ 違うんですってば！」

周りから白い目で睨まれたまま無罪を訴え続けながら、少年は店員に店内の奥へと連れて行かれた。

現行犯って、捕まった時は必ず無罪を主張するんだよな。そんなあるあるを噛み締めながら、魔理沙は連れて行かれた少年をただ何もせずに見送っていた。

ただ一人、パチュリーを除いては。

「魔理沙、今の表情なんか変じゃなかった？」

「変って、何が？」

何を思ったのか、パチュリーはいきなり真摯な顔になって魔理沙に尋ねてきた。

「今あの子の顔には『驚き』と『恐怖』、合わせて困惑があった。バッグから漫画が出たときも、さらに本心から『驚き』があった。自分が盗んだなら、『驚き』なんて無いはずよね」

「演技じゃねえのか？」

「いいえ、欺瞞じゃないわ。『驚き』は簡単に擬態されるけど、瞼は開かれているし、見たところ慌てふためいている。なによりもタイミングが正確よ。」

なんか引っ掛かるわね……」

「パチュリー、今の分析はノーベル賞やりたいけど、もう諦めな。あいつがやった証拠はバッチリあがってるんだぜ？」

そう言うないなや、パチュリーは魔理沙を差し置いて先に奥に進んで行った。

「本気かよ、パチュリー……」

なんだかわからないけど、パチュリーには何かが引っかかったらしい。何も見えないし、知らない魔理沙については行けないが、心配になって慌ててついていった。

×

「面見ただけで、嘘が見抜けるかあ」

——狙った獲物は既に手に入れた。

絶対にバレることはない。今も店員にすらバレてすらいない。もう何度も繰り返している確実な方法だ。

すべての道は、この白いバッグに繋がる。

得るものは、全てこの中に入れて……、あとは去るのを待つだけだ。

これで完璧。

さあ、早くおいとましよう！

——ビビビビビッ！

ビビビビビッ！

×

——ビビビビビッ！

一度の警鐘は異様に長く鳴り続けた。時間はおよそ十分間。だが音は放っておいても、やがて自然に止まった。

その間に一番に去った綺麗なお姉さんを始めとして、いろんな客達が逃げるようにそそくさと出て行ってしまった。

ただ一人、いや二人を除いては。推して参ったパチュリーと、それにつられた魔理沙であった。

二人は従業員部屋の前に並んで立った。部屋に備わった引き戸に

は、小さな覗き窓がついたについていた。そこには話し合う、もとい尋問する二人の姿が映っている。

だが取り込み中にもかかわらず、ノックもせずにパチュリーは堂々と従業員部屋に入ってきた。話はまだヒートアップとまでは言っていなかったようだ。

「ちよっと、失礼しますよ」

「……！？ 何なんだ、君達は！ 勝手に入ってきてきちゃ駄目じゃないか！」

店員から当然の返答がやって来た。だが、パチュリーは引かない。「あのー、私、先ほど彼が万引きしていたにしては疑わしいところを見つけたんですよ。と言うわけで彼の尋問が変わってくれませんか？」

パチュリーはあまりにも唐突に話を割り出す。この人が変わったとも言わんばかりのパチュリーの行動力に魔理沙は呆氣にとられた。かく言う疑われた少年も、泣きそうな面を上げて乱入してきた魔理沙達をみた。

「疑わしいところがあつたっただって？ お嬢ちゃん達、冗談でしょ？ 現にこうして彼のバッグに未会計の商品があるのに」

「そうだけパチュリー、面から同情してるのか知らないが、証拠はもうあがつてるんだぜ。余計な介入はよした方が……」

「いや、だから！ 僕はやってないんだってば！」

少年はまだ自分の無罪を割り込みながら訴え続けていた。

「君ねえ、ここまでやっておいて今更やってないってのはないんじゃないの？」

「ああ。店員の言うとおり、お前のはまるでたちの悪い悪あがきだ。捕まるのが相当やなんだろう」

少年の反論も虚しく、店員に続いて魔理沙も糾弾に参戦した。少年の唇がわなわなと震える。手をいちいち組み換えてもいる。魔理沙が見たところ、この少年は先ほどよりも慌てているようだ。

「君、正直に話せば楽になるよ？ 今なら両親や寺子屋には連絡は

しないで……」

「だから！！ 違うって言ってるだろ！！ どいつもこいつも勝手な事ばかり言って！！」

ついに少年は身を乗り出して吠えた。バンと机を叩き、起立と同時に座っていた椅子もなぎ倒した。魔理沙は驚き、反射的に一步後ろに下がった。

「おいおい、マジにヒートアップしたか？」

「――魔理沙、糾弾はこれでおしまい。もう充分に読みとれたわ」「何ですと？」

ここでパチュリーが改めて口を開き、魔理沙は思わず聞き返した。「結論から言わせてもらおうわ。まず、彼はやっていない。さっき彼が怒鳴りあげたとき浮かべた表情は『怒り』と『悲しみ』の混合。味方のいない孤独による、絶望の顔ね。あんなに糾弾されたなら、普通は『悲しみ』なんてわからないわよ」

確かに魔理沙がみる限りでは、少年の目元には涙らしきものが浮かび上がっていた。素人目で魔理沙も少年の面を見るが、それは納得が出来ないでもなかった。

まず、彼はやっていない。パチュリーの短い一言は少年の顔を『悲しみ』から取り除いた。

「でも、こっからどうするんだ？ どうやって覆すんだ？」

「それをこれから始めるんでしょ」

そして、パチュリーは強引に尋問のテリトリーを持って行った。

店員を追い払い、パチュリーは少年と向かい合った。

「君の名前は？」

「わ、^{わたりばし}渡橋です……」

「年齢は？」

「一五です……」

「友達仲は？」

「悪くないです……」

「今日は一人で？」

「はい……」

「何を買いにきたの？」

「それは……」

絞り出したような声で少年はようやく順々に答えて行くが、最後の質問には目をそらして絶句し始めた。

「問題集を買いに来たんですよ……。数学の……」

しばらくして渡橋はようやく答えられた。その時、渡橋は自分の首をかくように撫で始めた。

「……………」

「パチュリー？ どうした？」

「……ごめん、続けて」

妙な一時停止であったが、魔理沙に言われてパチュリーは話を元に戻した。緩やかなパチュリーの会話が効いたのか、今度は渡橋から口を開いてくれた。

「それにこの漫画なら、僕はもう持ってます。盗むことなんか僕はスリルなんて覚えるわけじゃないし……」

「それなら、どうして君のトートバッグなんかその漫画が入ってたの？」

「知りませんよ！ おおかた、誰かが僕のバッグの中に入れたんでしょ！」

「……………」

この質問に、渡橋は怒りを込めた語勢で言い払った。魔理沙にわかるのはここまでだが、パチュリーがなにも言わないと言うことは、何かが引っかかっているようだ。

物は嘘をつかない その式

十

「パチュリー、あいつ本当の事言ってるように見えたか？」

一端、尋問を打ち切った魔理沙とパチュリーは従業員部屋を抜けて、引き戸の窓から様子を伺っていた。部屋の中で一人になった渡橋は、表情を崩す事もなく、恐縮したまま座り続けていた。

「うーん、そうね。半分は本当の事を言って、半分は嘘を言ってたわ」

「半分？ それはどこからなんだ？」

「私がどうしてバッグに漫画が入っていたのかを尋ねた時よ。知らないって言った後の反応が変わったわ……」

『おおかた、誰かが僕のバッグの中に入れたんでしょ！』。この台詞を言ったとき、顔に浮かんでいた『怒り』と『嫌悪』の表情が本気じゃなかった。おかしいわよね、普通擦り付けられたのなら誰だって怒るし不愉快はずなのに」

「本気じゃない『怒り』と『嫌悪』って、どんな顔なんだ？」

魔理沙は待ったをかけて解説を求めた。するとパチュリーはポケットから紙に包まれた飴玉を取り出して、その場で開いた。

「魔理沙、あーんして」

「お、くれんのか？」

パチュリーに言われた通り、魔理沙は口を開いた。だが、パチュリーの差し出した飴玉は魔理沙の口に向かわず、自分の口に入れてしまった。

よくあるいたずらの典型だ。

「——ってお前が食うのかよ！」

「ほら、今の魔理沙の表情が『怒り』。これに鼻のしわを入れたら、『嫌悪』が混ざる。」

『怒り』と見極める重要な点は、眉間の縦じわ、瞼の緊張、下がった唇。『怒り』は顔の三つの領域に現れないと曖昧になっちゃうの」

「……マジで？」

私って怒るときこんなに顔が変わってるのか？ 魔理沙は不意に確かめようと自分の顔に触れてみた。

「ねえ、魔理沙。どうしてあの子は怒るべきところで怒らなかったのかな」

「それはお前の専門だろ。私は魔法使いだぜ？」

「ふーん、じゃあ魔理沙は魔法専門家ね。だったら星宿神の十二星梵印章も完璧なの？」

「あ、ああ、もちろん完璧だぜ……」

実を言うと、いくら魔法に優秀な魔理沙でも、マニアックな魔法までは完璧ではなかった。詠唱魔法や護符術タリスマンはなんなくこなせるのだが、梵印章はまだ苦手の領域で……、って、とにかくこうも言われたからには、魔理沙は嘘でも自信があるように答えた。

急に首がむず痒くなったのか、魔理沙は不意に首を掻くように手を伸ばした。

「……………？ 魔理沙、いま首筋触ってない？」

「え？ あ、ああ、自然に手が回っちゃったぜ」

するとパチュリーは、何かを見つけたかのような目で魔理沙を見つめ始めた。いつも弱々しく半開きの目が、パツと大きくなるように開かれていた。

「魔理沙、ストレートに聞いていい？ 梵印章はまだ完璧じゃないの？」

「なっ！ そ、そんなわけねえだろ！」

「『驚き』と微弱の『恐怖』……。凶星ね」

「——あう！」

もはや誤魔化しも通じなくなったパチュリーの前に、魔理沙は絶句するしかなかった。

「だって、梵印章は東洋呪術でも神じゃなくて仏様の力だし、指の形と呪文の同時儀式が覚えにくくてさあ……」

「射命丸も動機を答えたとき首を触っていたし、渡橋も来店の目的を言ったときもそうだった。」

これは表情分析じゃないけど……、彼は嘘をついている！」

「人の話を聞けよ！　――ってマジでか！」

魔理沙はツツコミと驚愕がいつぱんに出た。

本になかった新たな嘘の発見を確信したパチュリーは再び従業員部屋に足を入れ、渡橋と向かい合った。

「渡橋君、もう一度聞くわよ。君はどうしてこの本屋に来たの？」

「え？　だから、問題集を……」

「嘘はよくない。正直に。私を誤魔化そうとしても無駄よ」

「こいつの言うとおりだぜ。私もついさっきこいつに腹の裏を全部みられた」

詰め寄るパチュリーに、後から入った魔理沙は合いの手を入れた。

渡橋の表情が一瞬で青くなった。

「今、渡橋君の顔は『恐怖』が表れるわ。本当の目的は何なの？」

「言ったら、信じます？」

「君が犯人だと言うこと以外なら」

「じゃあ、あの……正直に話します」

パチュリーの放つ圧力が観念させたのか、渡橋は弱々しい声で言い出した。

「実は、僕、ここには誰かに合うために来たんです……」

「会うつて、その人と会合するの？」

「いいえ、そうじゃなくて、僕の一方的な熟視なんです。ここで、いつも来ている、女の人を、綺麗な女の人を、遠くから見ていたんです」

「――はー」

渡橋は何を恐れているのか、イライラするほど切れ切れとした口調で話し出した。

「……呆れたわ」

「……呆れたぜ」

パチュリーに嘘をついでまで、隠し通していたものが思春期独特の視姦だとは思ってもよらなかった。

結局、今は渡橋の来店の目的を長々としか聞くことができなかった。肝心の渡橋が盗んだかの安否は、嘘を見抜けるパチュリーでも掴めなかった。

ただ、渡橋が無罪である可能性はより高まっていた。

十

「かー。結局、面見て嘘を見抜くってのも案外無敵じゃないんだな」再び部屋を出て、落胆に肩を下ろす魔理沙。向かい合って立つパチュリーも腕を組んでは腑に落ちないのか指を動かしていた。

悩み続けるパチュリーのだんまりが、二人の長い沈黙を起こす。

「パチュリーさん、魔理沙さん！」

その時、聞き覚えのある陽気な声が沈黙を破った。思わず向いた魔理沙の目先には、入り口でこれまた陽気に手を振る射命丸の姿があった。

「なんだ射命丸か、どした？」

「どうしたじゃないですよ！ また万引き犯が捕まったんでしょ？ 今日で連続一六件目、些細な万引きの急上昇。こりゃあスクープですよ！」

「万引きって、どうしてお前が知ってるんだ？」

「だって今、役人が歩いてこっちに向かっているんですよ。犯人の顔が見たくて文字通り飛んで来ちゃいました！」

「役人が来るって………オイ、おっちゃん！ 役人にチクったのか！」

魔理沙は射命丸から目をそらし、今度は会計台にいる店員に向き変えた。

「当然だろう。俺はもう待てない。お嬢ちゃん達が意地張って時間

をかけるから」

「マジかよ……」

ここまでやられてしまっただけは、ひとたまりもない。魔理沙は肩をさらにすくめ、いの一歩に観念した。

「パチュリー、もうゲームセットだぜ」

「……………」

だが対照的に、パチュリーは唇を結んでまだ納得がいかない顔で壁にすがって悩み続けた。それでも、魔理沙は諦念を促した。

「まあ、お互いにいい勉強になったんじゃないか。パチュリーは更に仕草で嘘が見抜けるようになった。私の場合は……………、そう警報機がどんな音を出すのかもわかったんだぜ。」

十分も鳴り続けていたんだから、耳が音を覚えてるぜ」
「十分も？」

言っただけは店員だった。

「ああ、まあ細かく言えば七、八分ぐらいはは鳴り続けていたぜ。なんかおかしいか？」

「そんなはずはないだろ。あの警報機は長くても三、四分は鳴る事になってるんだぞ」

「その話、本当？」

するとパチュリーは思考を解くと、いきなり割り込んできた。

「当たり前だろう。そんなに長く鳴らして何になる？」

「でも、長くなっていたのは事実だぜ？」

「おおよそ正規の時間の二倍の長さで……………」

……………。

一斉に静まる一同。改めて納得する事実。これって、まずいのではないか？

「おう、矛盾が見つかったな」

「もうおせえよ、おっちゃん！ 役人が来ちゃうよ！」

「そうですよ、それに万引きは度重なっているから無罪の弁解なんて通じませんよ！」

今更気がついた店員に、魔理沙と射命丸は怒鳴り慌てふためいていた。

お役人さんは今でも歩いてこっちに向かってきている。くどいようだが、今更割り込んできた事実で渡橋の無罪の追加立証なんて間に合わない。

「おいおい、どうするんだ？ この毎日ほのぼのした幻想郷で冤罪なんてシャレにならないぜ。神への冒瀆だぜ」

「じゃあ……、諦めようか」

そう一言で片づけたのは、恐ろしいほど涼しい顔をしたパチュリ―であった。

物は嘘をつかない その参

＊

「どうして連れて行くんだ！ 僕はやってないって言ってるだろ！」
やがて、渡橋が役人達に連れて行かれた。

渡橋は抵抗し続け、断固として動こうとしなかったが、両手首に縄を縛られ二人がかりでついに店の外まで引きずり出されてしまった。

「お願いだ！ 信じてくれ！ 僕はやってないってば！！」

ズルズルと地面をひきずりられながらも、渡橋は無謀にも無罪を訴え続けていた。

だが、その叫びは結局連行される渡橋を通り人が白い目で見られる要因になっていただけだ。

繁華街にいる誰しもが、罪のない渡橋を白い目で見つめる。唯一そうではなく、逆に腑に落ちないような目で渡橋を見ているのは魔理沙、あと射命丸ぐらい。連れて行かれる渡橋を見送るように追いかけては、店の外ですつと渡橋と役人を眺めていた。

ただ、パチュリーだけは失敗を悔やんでいるのか渡橋から目をそらして、背中を向けて歩き続けた。

「パチュリー……」

「パチュリーさん……」

本当にこんな納得のいかないままで良いのだろうか。そう思っても、何も言わず、何も表情も浮かべず、通りを歩くパチュリーを魔理沙は不安を浮かべて見ていた。

十

「お願いだ！ 信じてくれ！ 僕はやってないってば！！」

何も知らない少年が、無謀に叫びながらも連れて行かれる。
誰しもが白い目で、役人の腕の中で暴れる彼を見つめている。
彼はマヌケだが、作戦には十分に協力してくれた。もちろん、本人は知るよしもないがこちらは満足なほどの収穫を得ることができた。

こうして、人ごみの中でとけ込むようにあの少年を見ていると、これは滑稽だった。自分の計画がうまくいったのが喜ばしいのか、それとも他人をこうも蹴落とせたのが面白いのかどっちつかずだが、今は何も浮かべることは出来ない。

何度もやっていること。こうやって、連れて行かれる奴らをなにも知らない先入観に捕らわれた奴らのするような目で眺め――

「――偽りの『嫌悪』に押し殺した『幸福』。犯人はあんたね」

――！？

十

「――偽りの『嫌悪』に押し殺した『幸福』。犯人はあんたね」

魔理沙達が渡橋に注目していたその一瞬だった。渡橋とは逆の道に進んでいったパチュリーは、いつの間にか野次馬の中から一人の生き物を正面から睨みつけた。

いや、パチュリーの場合は分析だった。真っ正面に立っていたのは、長い髪に質素で端麗な女の人。さらに肩には女性特有の白いトートバッグ。どこかで聞いたような容貌であった。

名前は――^{アサミ}薊と名乗った。

「あ、あの……、何かようですか？」

「あなた、今どんな状態かわかってますか？」

「どんなんて……、今回で一六件目に起きた連続万引き犯が捕まっ

て、連行されているんでしょう？」

「それで、あなたは連れて行かれた彼を見て喜んでませんでしたか？」

パチュリーは唐突に問い詰め始めた。

「え？ まさか。そんなわけないでしょう。なんで連れて行かれる人を見て喜びを……」

「彼を見ていた時、眉間にシワがあったのに、頬と目の周りが一緒に収縮していた。その『幸福』は成功への喜びでは？」

魔理沙達が急いでパチュリーを追いかけたとき、ズンと詰め寄るパチュリーにアザミはつかさず反論した。

「な、何を言ってるんですか！ どうしてわたしが連行される人を見て笑うんですか？」

疑うパチュリーと疑われるアザミを他の聴衆が注目し始める。

パチュリーはそれでも冷静だった。その目は、全てを見通しているようだった。

「最初、私はこんな悪人が晒される中で笑うのは『嘲笑』と思っていました。しかし、あなたの場合は『嫌悪』であがるはずの瞼に緊張が見られません。意図してあげてます。つまり、あなたの『嫌悪』は偽り。」

逆に顔の筋肉は『幸福』を表現している。グッと唇を結んで現れた表情を押し消そうとしているのが見えた。つまり、本心は『幸福』の喜び。

あなたが『幸福』を浮かべる理由で、考えられることは一つです。それは本当はあなたが盗んで、彼にうまくなすりつけられたからじゃないですか？」

「ば、ばかばかしい。私が密かに笑っていたからって犯人扱いする気ですか？ そんなもの、完全な推測だけです。私がやったって確証にはなりません」

「もちろん、私だって見つけた分析結果で正す真似はしません。ただ、あなたを疑う要素ができた。それだけです」

「ほら、そうでしょ。顔を見るだけで、納得のいく根拠はあがってないでしょ」

問い詰めるパチュリーの話に穴を見つけ始めたアザミは、言下に議論を崩そうと食いかかった。

「そうですね。表情がわかっただけでは、何にもなりません。ですが、私がここから手を引くのはここに証拠が無いときです」

思いがけないパチュリーの発言に、魔理沙とアザミは哑然した。

「さっきから、あなたは証拠の話を持ち上げませんね。普通なら証拠の提示を求めるはずなのに、あなたは証拠を避けているようですね。」

つまり、証拠はあなたの手元にある。ということじゃないですか？」

アザミはわなわなと唇を震わせた。同時にびくんと体まで動いていた。

「今、証拠と言ったとたんの一瞬の『恐怖』が浮かびましたね。」

そして、同時に肩に下げたバッグに不意に手をかけた。それは『無意識の防御』と言ってやましいものが中にある場合に出るんですよ。あなたが欲しがっている証拠は、そのバッグの中にあるんですよ？」

「な、そんな訳……」

「――あるな」

すると会話の途中で魔理沙が唐突に割り込み、アザミのバッグにいきなり手を入れた。

「ちょっと！ あなたまで何を！」

「みつけたぜ、封開された人気の漫画本四冊」

そして魔理沙はバッグから、本を無理やり取り出して公に掲げて見せた。聴衆の注目が、魔理沙の手に集められた。

「ど、どうやって外に持ってこれたんですか？ 入り口にはセンサーが置いてあったのに……」

「簡単よ。センサーがあるのに盗めたんじゃないくて、センサーがあ

ったからこそ盗めたのよ。

この些細すぎる万引きの方法をトリックと呼ぶにはふさわしく無いでしょうけど、こんな構成になっているの。

まず自分の標的を捜しつつ、なすりつける相手も見つけるの。そして自分のを盗んでバッグに入れ、同時になすりつける相手のバッグの中にも未会計の商品を入れる。その後、相手が商品を入れたままセンサーを通り過ぎようとすればもちろん警報機になる。ここからが肝心。相手が店員に連れて行かれ、他の客の関心が捕まった相手に向いた隙について、警報機が鳴ってる時間内に抜け出す。これはマジックでも使われる簡単だけど盲点を突きやすい仕掛けよ。魔理沙の出してくれた二倍の長さで鳴り続けた警報機の謎は、コレだったのよ。

例え連行される人が大声で無罪を主張しても、それを見る聴衆は信じることは無いし、ここ最近新聞に同事件が載せられているから余計に信じる事はない。

コレをアナウンス効果って言うの。本来は選挙や経済変動に使われるけど、こういった先入観を与えたりもするの」

射命丸と魔理沙は思わず、感嘆の声を漏らした。

「あの少年だけじゃなく、あなたも毎日のようにあの書店に通うように来てましたね。来る度に彼に愛嬌を振りまいて、距離を縮めていたとか。何を求めているわけでもなく、冷やかに来ていると。

つまり、あなたは彼を標的にしていた。彼に容易に近づくまで時間を置き、好機を伺ってなすりつけた」

「だ、だったら、わたしも真犯人の身代わりになっていたかもしれないじゃないですか？ たまたまわたしが犯人と同じ時期に抜け出しただけかもしれない！」

決定的な証拠が表沙汰にされても、アザミはまだ足掻こうとする。往生際の悪い奴だ。

「そう来ますか。だったら、直ぐにでも更なる証拠を出しますよ。五百円以内で」

「何ですって……？」

「あ、今度は『恐怖』の顔！」

細かに顔を変えるアザミを、パチュリーはからかった。金額を定めて証拠を出す術には、魔理沙も少し気になった。

「五百円以内で出る証拠って何なんだ？」

「もちろん、あとは科学の力に頼るの」

「それって、五百円で永琳に協力を求めるとか？」

「違う。もっと手軽な方法よ。探偵物のお決まりの証拠、指紋採取なら五百円以内で、さらに私にだってできるわよ」

「指紋採取？ 何を使うんだ？」

「使うのは、シャープペンシルの芯と筆。細かい鉛の粉は指紋が出るの」

「し、指紋！？」

アザミは魔理沙にでもわかるほどの『恐怖』の表情を浮かべ始めた。

「さあ、いい加減罪を認めたらどうです？ あなたが今ここで否認しても、指紋さえ出せばすぐにわかりますよ」

「う、ああ……」

「なんなら、今からでも採取して彼のカバンにあったものとも照合してもいいのよ？」

パチュリーの最後の言葉は、アザミを絶望の表情に変えた。

「うまくいくと思ったのに……、あのクソガキがつ！」

清潔な雰囲気は消され、今は削がれた強欲感が顔をゆがめ始めた。

「あなた、この計画は今回だけじゃないでしょ」「何ですって……？」

「ここ最近頻発する連続万引き犯は、主格はすべてあなたでしょう。かつて逮捕されたのはあなたに擦り付けられた人たちだったんですよね。」

あんたを疑ったのは、渡橋の口だけじゃなく、あんたの口からでもたある台詞にもあった」

「……わたしが何を言ったの？」

「最初にあなたに話しかけたとき、あなたは一六件と正確な数を知っていましたね。どこでそれを？」

「そ、それは噂や新聞で数を……」

「嘘ですね、それは。新聞にはそんなことはかかれてなかった。そうよね、射命丸」

「そうです。万引きなんて載せるほどじゃありませんから、載せたのは今日の朝刊だけです。正確な数がわかりませんから十数とぼかして」

「と言うことは、噂の可能性も低い。あなたはどこでその数を知ったのか。その答えは全主格はあなただからで……」

「ふ、ふざけないで！ たまたまわたしが数を知っていたと言うことは考えなかったの！？」

さらなるパチュリーの発言に、アザミは異議を唱えはじめる。

「そう言うと思いました。いくら全ての人たちが全面否定をしている共通点があったといっても、あなたは納得しないでしょう。」

でも、あなたはいつの間にか自分で犯行を認めたんですよ。数や共通点を知っているだけではなく決定的な」

「なにをよ！ 一体わたしが何を認めたのよ！」

「あなたの表情。話しかけたとき『幸運』の喜びだった」

「そ、それは認めたわよ。連れて行かれる彼を見て、成功したから」
「それがでること自体が間違なんです。コレが初犯なら、浮かび上がる表情は『喜び』ではなく、普通は『安堵』になるんですよ。もしここで『喜び』が出たのなら、幾度の成功した証拠。あなたは今、それを認めた！」

「………そんなこと！ まかり通るわけが！」

「今それが認められなくても、私が役人に口を添えれば進展しますよ。例えば、自宅捜査。あなたの盗品は見つかるでしょうね」

「そ、そんな……」

最後に出した決定的な証拠を前に、アザミは絶望に肩を落として地に崩れ膝をついた。

表情分析しかできないパチュリーだが、今までの連鎖が断ち切られた。

「――Jackpotね」

完勝を果たしたパチュリーは背中を向けて、静かに、そして高らかに言った。

物は嘘をつかない 終章

＊

パチュリーの大胆な証明の後、アザミは渡橋に代わって役人に連れて行かれた。認めていたのか、アザミはおとなしく連行されていた。

連れて行かれるアザミを見る聴衆の目は、やはりパチュリーの言う『軽蔑』のままであった。

「お手柄ですね！ パチュリーさん」

「まあね」

「でもなんであいつだって分かったんだ？ あんなに聴衆がいたのに」

「あれはね、渡橋の尋問のときの表情でわかったの。どうしてバッグに商品が入っていたとき、彼は最後になると『怒り』が無くなっていた。誰なのかわからないなら、なおさら怒るのに、渡橋はそうではなかった。

どうして『怒り』が表れなかったのか。たぶん理由は誰かを知っている上に、かばっていたと考えたの。

そして、尋問の最中に聞いた渡橋の恋話に特徴が露わになった第三者が出てきたから、まず該当する人物を当たったら案の定そうだった。というわけよ」

「……………これからはお前に嘘がつけないな」

魔理沙は観念して肩をすくめ、パチュリーは少し胸を上げた。密かに威張っているらしい。

「あの、先ほどはどうもありがとうございました」

そして渡橋は魔理沙達の前で、お辞儀をしながら礼を言った。

「よくケロリとしているな、あんなヒデユ目にあったのに……」

魔理沙は思わずつぶやいた。

「何の話です？」

「何でもない。次からは女に気をつけろよ」

「そうします。本当に助けてくれてありがとうございます！」

もう一度深々と礼儀正しく頭を下げた渡橋と別れを告げ、魔理沙達は歩き出した。

「レミリアの『hobby Japan』買ったか？」

「うん、解決のご褒美に三割引きだって」

「タダにしないのか。ケチな本屋だな」

何気ない会話をしながら、夕日に照らされた街道を二人は並んで歩いた。

「二人とも！ こっち向いてください！」

言われて魔理沙とパチュリーが不意に振り向くと、パシヤツとカメラのフラッシュが目の前で焚かれた。光の後ろには、笑顔満面の射命丸がいた。

「な、何だよ、射命丸！」

「新しい記事にしようと思ひまして。見出しは、『表情分析のデコボココンビ、結成！！』。明日の朝刊に載せますね！」

宣言する射命丸は、張り切りながら高く飛び上がって行ってしまった。

「おい待て！ 何を勝手に書こうとしてんだ！ だから待てってば！」

怒鳴り散らしながら、魔理沙はそのまま箒に跨って射命丸のあとを追いかけて行ってしまった。

「あんたも待ちなさいよ……。乗せてもらおうと思ったのに……」
毒づくパチュリーの呟きは、すでに空高く飛んだ魔理沙の耳に入ることはなかった。

この些細過ぎる事件は、パチュリー・ノーレッジや霧雨魔理沙にとっては始まりにしか過ぎなかった。これから先、パチュリー達が見るのは果たして何を浮かべた『表情』になるのか、知る由もない

.....
o

物は嘘をつかない 終章（後書き）

いかがでしたか？

『表情分析』の初めての事件は、すつころびそうになる程些細でこすい窃盗事件でしたが、パチュリーを真摯に立ち向かわせました。テーマは『強欲』。このパチュリーの『表情分析』はこれからも続きます。この次に続編を出しますので、これからもよろしくお願ひします！

ここまでの話で、一言でも感想を心よりお待ちしております！
お願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8125r/>

東方真偽観　ーパチュリーに嘘をつけ！ー

2011年4月4日08時10分発行